



2024年3月22日

各位

会社名 トーカロ株式会社
代表者名 代表取締役 社長執行役員 小林 和也
(コード番号 3433 東証プライム)
問合せ先 取締役常務執行役員管理本部長 後藤 浩志
電話番号 078-303-3433 (代)

資本コストや株価を意識した経営の実現に向けた対応について

当社は、本日開催の取締役会において、資本コストや資本収益性についての現状分析を実施し、改善に向けた対応方針を決議いたしましたので、下記のとおり、お知らせいたします。

記

1. 現状分析

当社は、直近9年間のROEが株主資本コスト（8～10%程度）を上回っていることから、相応の資本収益性を維持できているものと認識しています。その結果として一定の市場評価を獲得し、PBRは安定的に1倍以上を維持できているものの、順調な業績進展により自己資本が積み上がった影響で、直近4年間のROEは当社目標（15%）に対して未達となっています。今後は資本効率向上のため、保有資産に対する積極的な施策が必要と考えています。

(当社各種指標の推移)

	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期
売上高（百万円）	39,742	38,084	39,294	43,813	48,144
経常利益（百万円）	8,076	6,812	8,914	10,571	11,003
経常利益率（%）	20.3	17.9	22.7	24.1	22.9
自己資本比率（%）	65.6	65.9	68.9	70.6	72.5
ROE（%）	15.2	11.3	12.9	14.8	14.3
1株当たり純資産（円）	617.80	662.28	727.06	807.31	884.83
期末株価（円）	872	1,019	1,448	1,360	1,296
PBR（倍）	1.41	1.54	1.99	1.68	1.46

2. 今後の対応方針

当社は、株主資本価値をさらに高めるため、以下の3つの施策を通じてROE15%の安定的な達成を目指してまいります。

【目標】

ROE15%を安定的に達成する。

【対応策】

① 収益力の向上

- 溶射を中心とする表面改質のトップメーカーとして存在感を発揮し、既存市場に頼ることなく、新皮膜の開発や新市場を創出することで事業拡大を図る。
- 自動化・IoT化の推進、新規成膜装置の開発等により、製造プロセスを高度化・効率化し、品質管理の強化と生産性の向上を図る。
- 技術優位性の確保と収益性の向上のために、設備投資（年間50～70億円）と開発投資（売上高比率5%程度）を継続的に実施する。

② 現預金水準の最適化（段階的な引き下げ）

- 生産増強や技術開発への積極投資を支える強い財務体質は維持しつつも、今後は資本効率の向上を図るため、最適な現預金水準を追求する。
- 営業CF+余剰現預金を原資として、成長投資（設備投資、開発投資、人的資本投資、M&A等）と利益配当へ積極的に配分し、残りの原資について喫緊の資金需要がない場合は追加的な株主還元も検討する。

③ 株主還元の強化

- 高水準かつ安定的な配当を継続するため、連結配当性向50%程度および純資産配当率（DOE）5%以上を目標とする。
- 自己株式の取得についても、機動的に実施を検討する。

以上

詳細につきましては、添付資料をご参照ください。

新たな可能性をプラスし、輝く未来へ。

資本コストや株価を意識した 経営の実現に向けた対応について



2024年3月22日



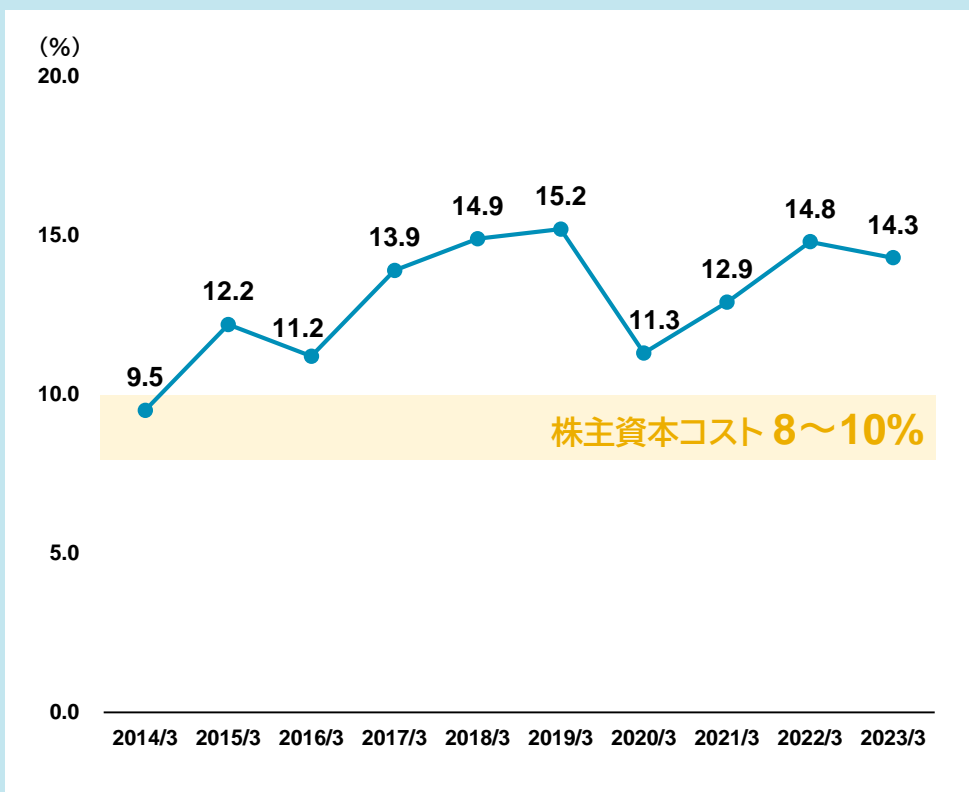
直近9年間のROEが株主資本コストを上回っていることから、相応の資本収益性を維持できているものと認識。その結果として一定の市場評価を獲得し、過去10年間のPBRは1倍を超える水準で推移

当社の株主資本コスト

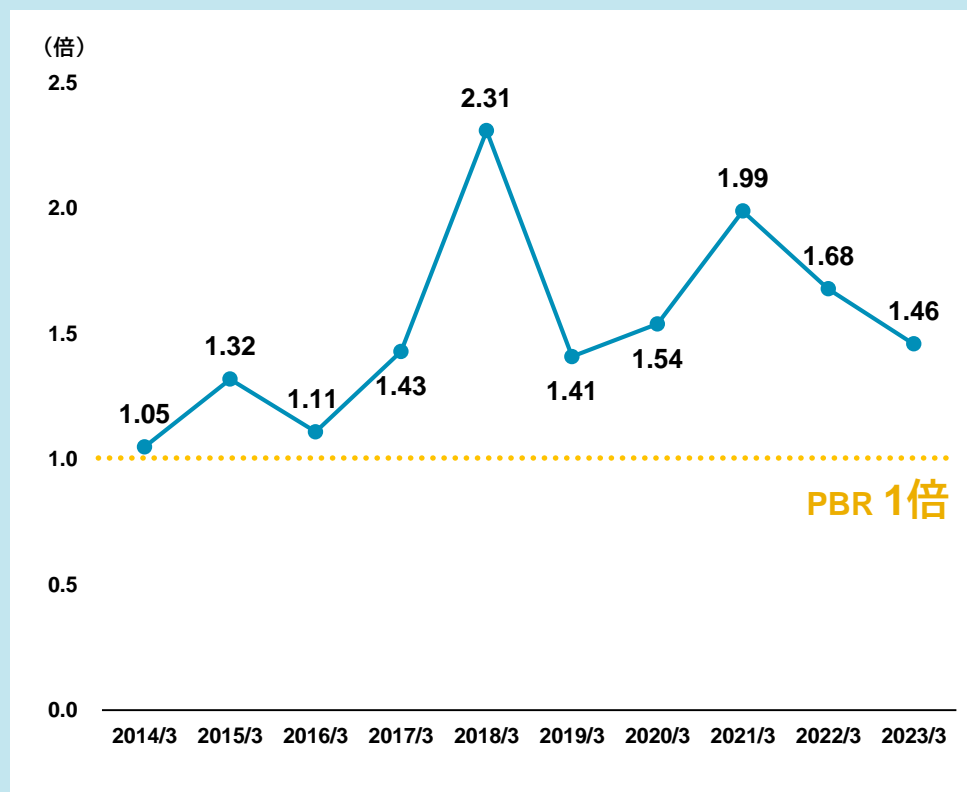
(参考値)
8~10%程度

一般的に妥当とされている計算方法によって証券会社各社が当社向けに試算した数値や、証券アナリストが算出した当社の期待収益率を総合的に勘案し、当社に要求されている株主資本コストは8~10%程度と認識

● ROEの推移

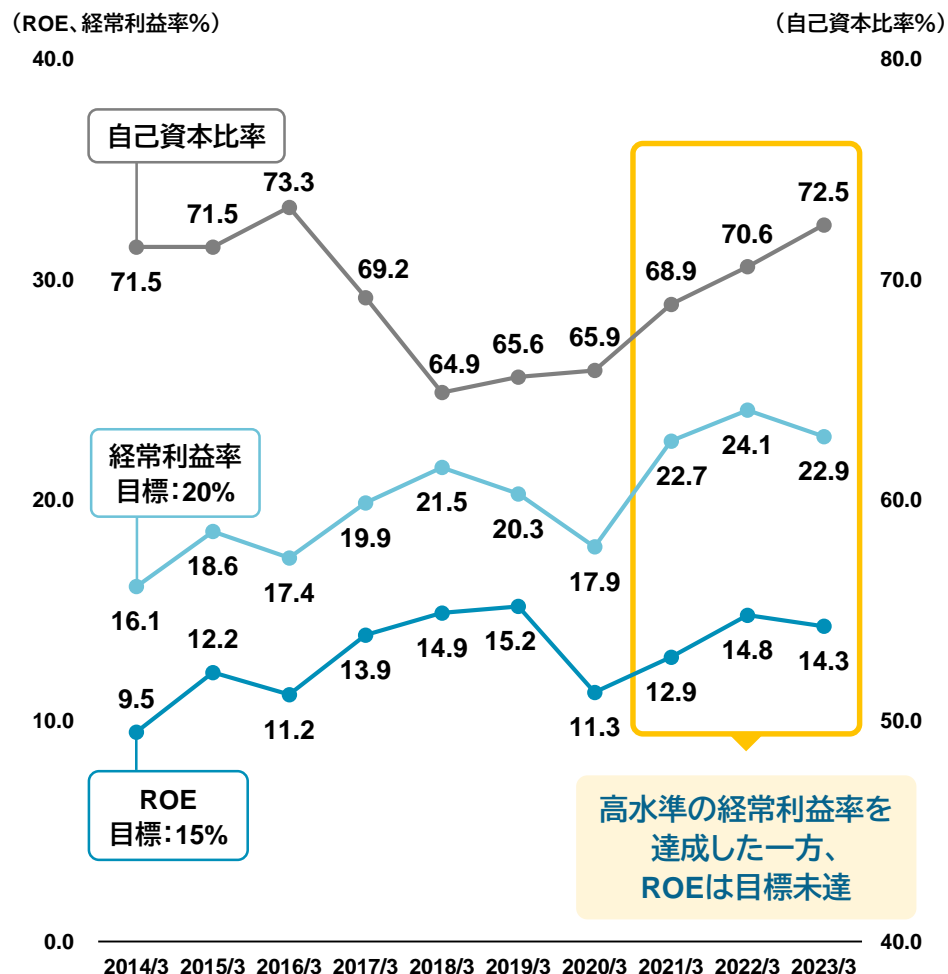


● PBRの推移

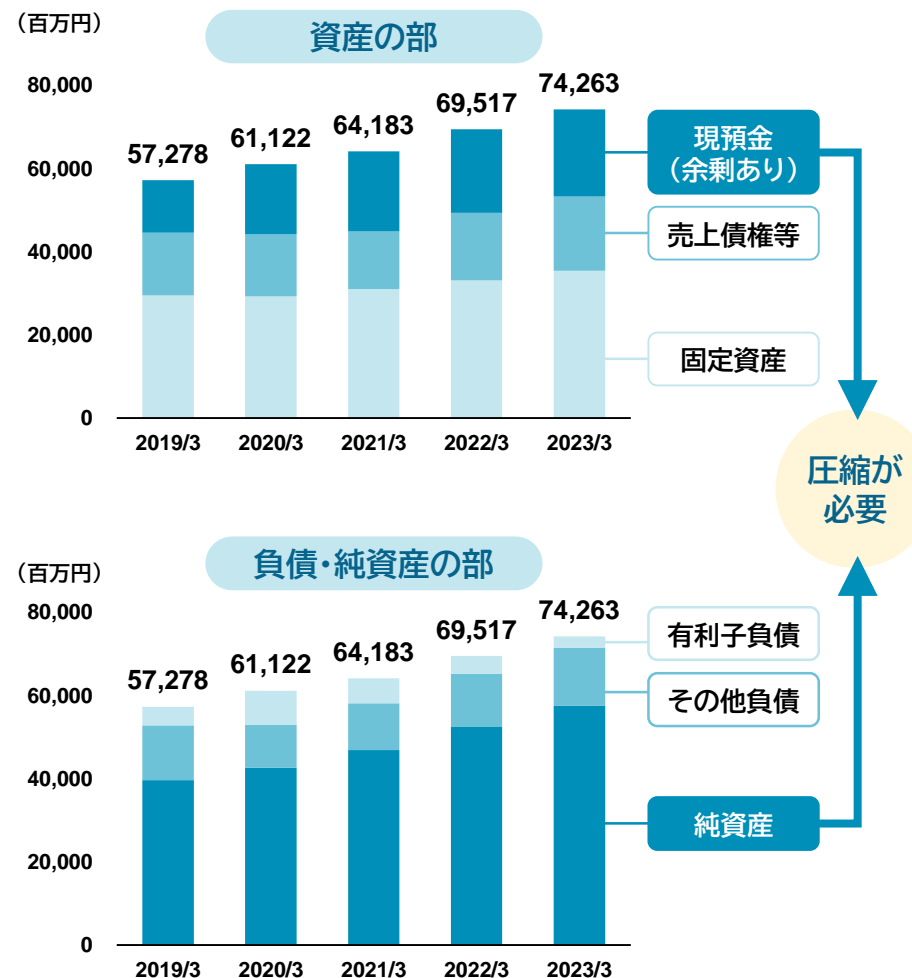


PBRは安定的に1倍以上を維持できているものの、順調な業績進展により自己資本が積み上がった影響で、ROEは目標未達となっている。今後は資本効率向上のため、保有資産に対する積極的な施策が求められる

重要指標の推移



バランスシートの状況



株主資本価値をさらに高めるため、3つの施策を通じてROE15%の安定的な達成を図る

目標

ROE15%を安定的に達成する

対応策

1 収益力の向上

- **溶射を中心とする表面改質のトップメーカーとして存在感を発揮**
既存市場に頼ることなく、新皮膜の開発や新市場を創出することで事業拡大を図る
- **品質管理の強化と生産性の向上**
自動化・IoT化の推進、新規成膜装置の開発等により、製造プロセスを高度化・効率化
- **技術優位性の確保と収益性の向上**
設備投資(年間50~70億円)と開発投資(売上高比率5%程度)を継続的に実施

2 現預金水準の最適化

- **現預金水準を段階的に引き下げ**
生産増強や技術開発への積極投資を支える強い財務体質は維持しつつも、今後は資本効率の向上を図るため、最適な現預金水準を追求。営業CF+余剰現預金を原資として、成長投資(設備投資、開発投資、人的資本投資、M&A等)と利益配当へ積極的に配分し、残りの原資について喫緊の資金需要がない場合は追加的な株主還元も検討

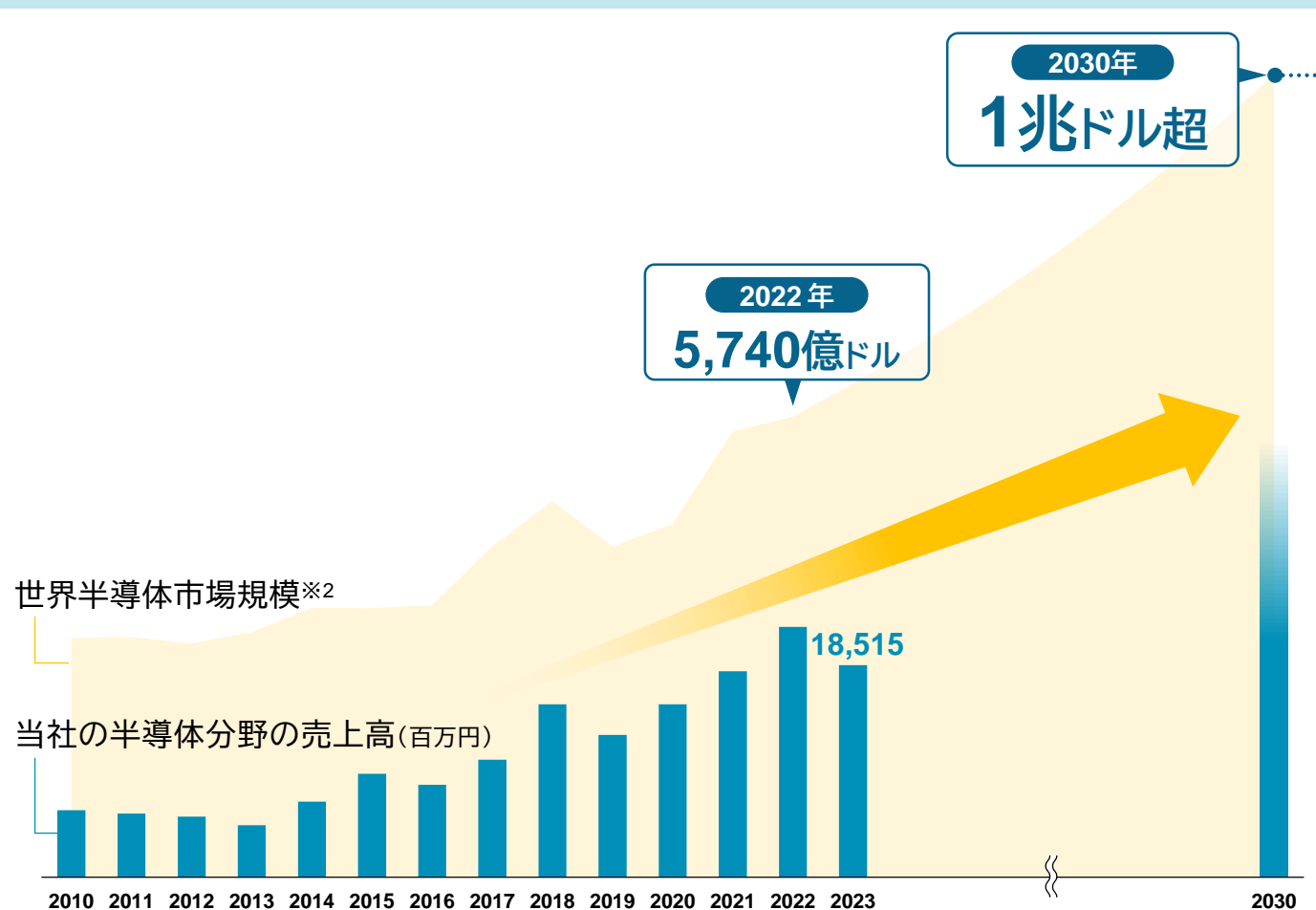
3 株主還元の強化

- **高水準かつ安定的な配当を継続**
連結配当性向50%程度(2023年3月期実績:41.4%)、純資産配当率(DOE)5%以上を目標とする
- **自己株式の取得も機動的に検討**

① 収益力の向上 (1/3 半導体分野の成長)

半導体分野※1においては、国内トップシェアの強みを活かし、市場拡大を事業成長に転換していく。また設備投資や開発投資を継続的に実施することで、半導体技術の進化に対応した新たなソリューションの展開を目指す

● 半導体市場規模と当社売上高の推移



市場は約**2倍**に成長
(2022→2030年)

生成AIや自動運転、EVなどの
需要拡大を追い風に

事業成長を実現

市場拡大に伴って
半導体技術も**進化**

既存領域にとどまることなく、
積極的な投資・開発によって

新規領域を開拓

高度な
テクノロジーを支える

※1 半導体製造装置部品に、発塵防止(耐プラズマ)や静電吸着の機能を付与する加工
※2 一般社団法人電子情報技術産業協会 世界半導体市場統計(WSTS)をもとに当社作成

半導体に次ぐ市場として、環境・エネルギー分野の開拓を進めることで事業拡大を図る。顧客(製造業)のニーズとして、環境負荷低減や省エネなどへの対応の重要性が高まるなか、当社の保有技術で顧客に高付加価値を提供する

表面改質※の機能

- 耐食性
- 耐摩耗性
- 環境遮断性
- 耐酸化性
- 遮熱性
- 耐プラズマ性
- 通電性・電気絶縁性
- センシング性
- 耐焼き付き性
- 潤滑性、グリップ性
- 保油性 等

マッチング

顧客のニーズ

- 生産性の向上
- 製品品質の向上
- 環境・社会課題への対応
 - 環境負荷低減
 - 省エネ
 - 安全衛生

人と自然の豊かな未来へ貢献

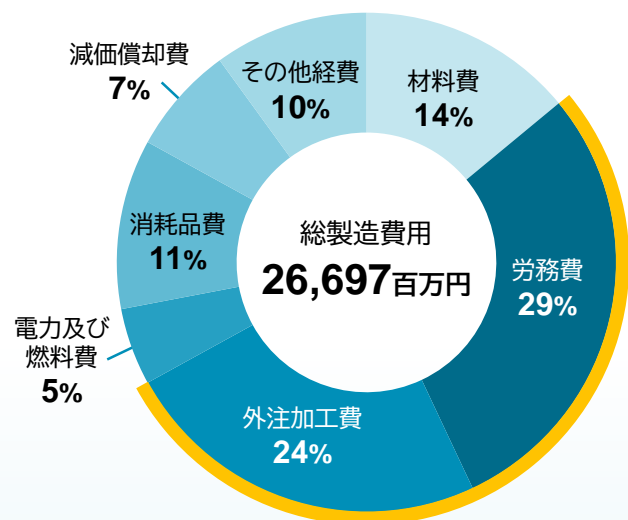
※ 様々な製品や生産設備に機能材料のコーティングや加工を施すことで、新たな性質や機能を与える技術

当社の表面改質加工は労働集約型である一方、オーダーメイド仕様が多く完全自動化との親和性は低い。そのため、収益力の向上を実現するには、効果が期待できる適切な製造プロセスに対して高度化・効率化を進めることが必要

● 当社の表面改質加工の特徴

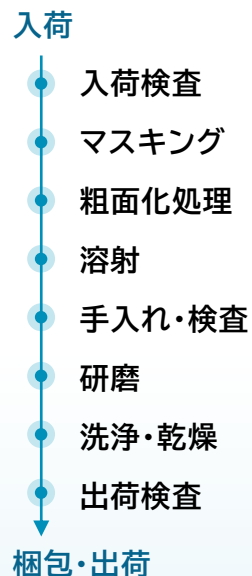
労働集約型の業務構造

製造費用の内訳 (2023年3月期/単体)



労務費と外注加工費が過半を占める

溶射工程(一例)



顧客ごとのオーダーメイド業務

顧客の要望に応じた
カスタム仕様

多品種・少量生産

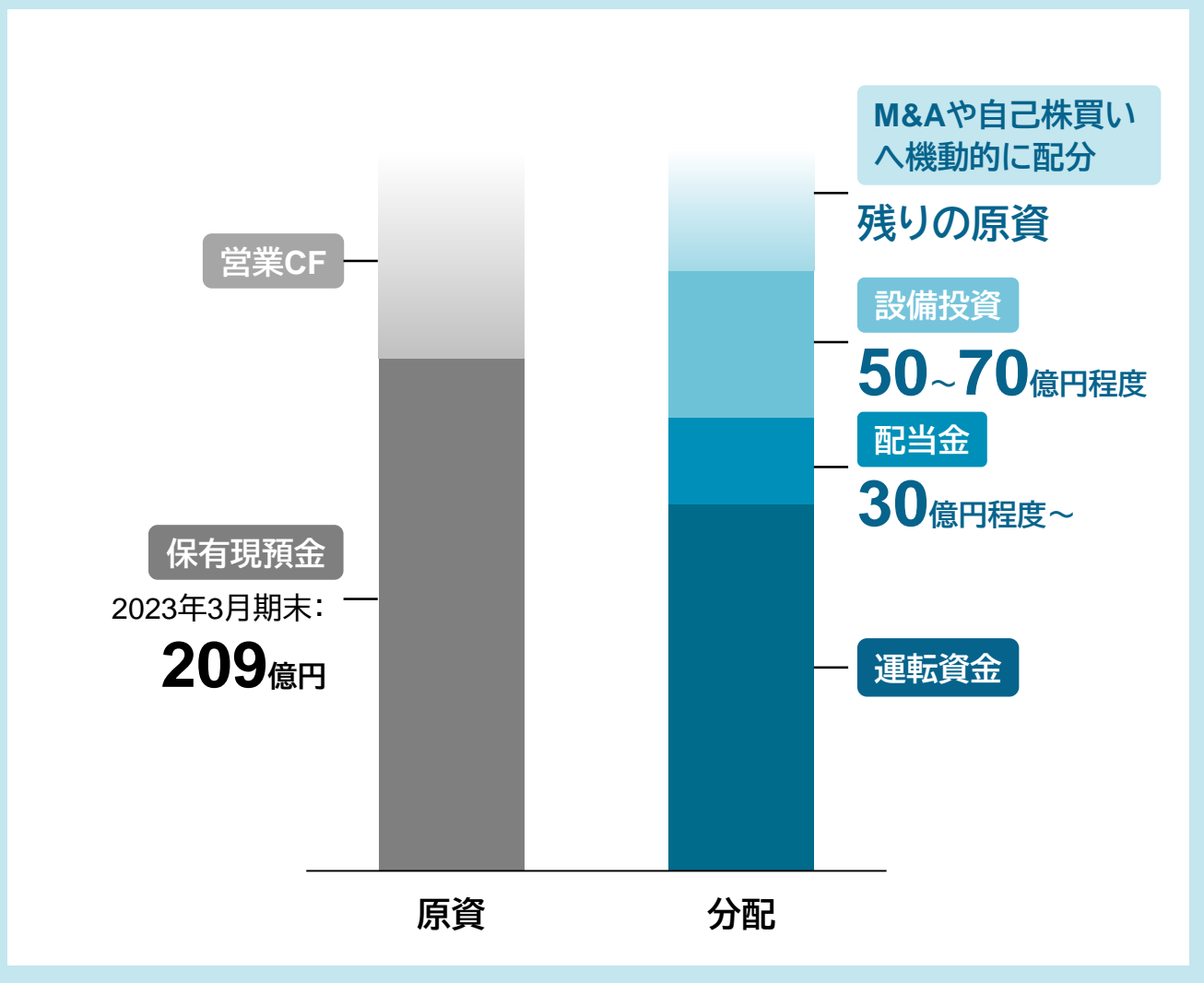
完全に自動化することは
難しい

改善可能な業務をしっかりと見極め、自動化・IoT化によって人への依存を低減。
生産性の向上とともに品質管理の強化を図る

② 現預金水準の最適化

資本効率の向上を図るため、最適な現預金水準を追求。営業CF + 余剰現預金を原資として成長投資と利益配当へ積極的に配分し、残りの原資について喫緊の資金需要がない場合は追加的な株主還元も検討

• キャピタル・アロケーション方針



機動的な投資を可能にする
キャッシュは手元資金として不可欠。

最適な現預金水準を

段階的に見極めていく

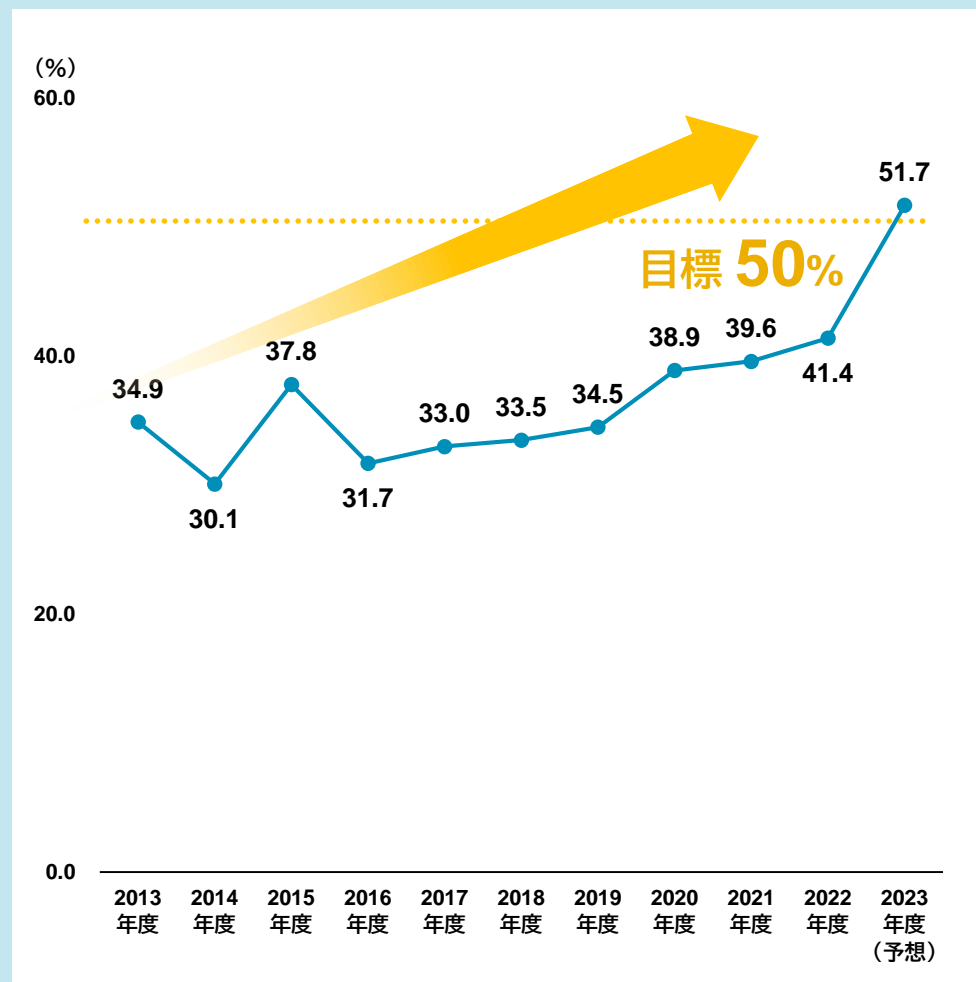


安定した財務体質と
高水準なROEのバランス

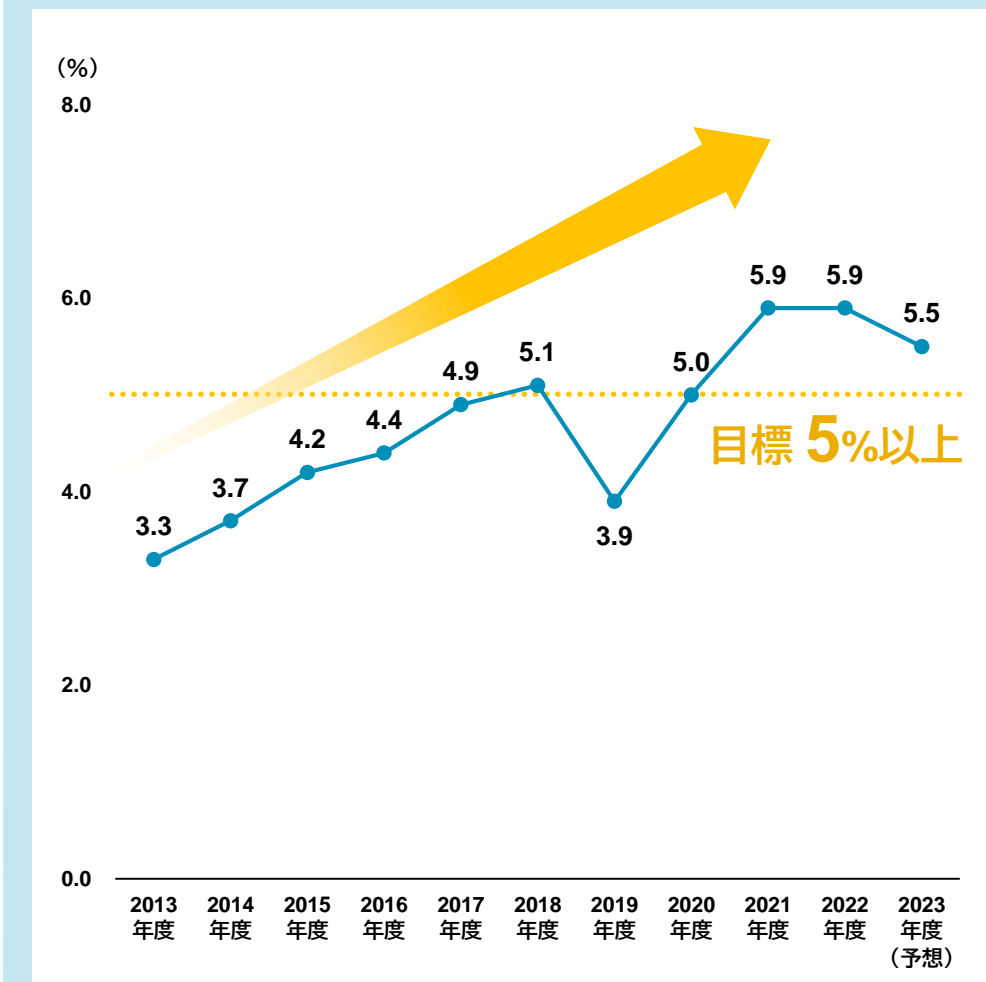
③ 株主還元強化

連結配当性向50%程度(2023年3月期実績:41.4%)、純資産配当率(DOE)5%以上を目標とし、高水準かつ安定的な利益配当を図る。また自己株式の取得についても、機動的に実施を検討

● 連結配当性向の推移



● DOEの推移



当社は溶射を中心とした表面改質技術のトップランナーとして、国内シェアNo.1を誇る。溶射法は材料などの選択肢が多く、顧客の様々な課題に対して最適なソリューションを提供できる点が強み

金属やセラミックスを高温で溶かした微粒子を機械部品などの表面に高速で吹き付け、高機能皮膜を形成

溶射法の概要

基材

- ・ 金属
- ・ 非金属
- ・ プラスチック
- ・ セラミックス
- ...



表面改質

- ・ 金属
- ・ 合金
- ・ サーメット
- ・ セラミックス

仕上げ方法

- ・ 面粗度調整
- ・ 表面形状の調整

豊富な機能

- ・ 耐摩耗性
- ・ 耐熱性
- ・ 導電性
- ...

高い付加価値

- ・ 新製品の開発
- ・ 生産効率の向上
- ・ メンテナンスコストの低減
- ・ 製品の高品質化
- ・ 安全対策

溶射の長所(その他)

- ・ 皮膜の形成速度が速い
- ・ 厚膜形成が可能
- ・ 鏡面仕上げや機械加工ができる
- ・ 適度に気孔を含んでいる
- ・ 基材温度を低く保って施工できる
- ・ 基材寸法の制限を受けない
- ・ 現場施工ができる
- ...

特徴

多様な
基材への適用

柔軟に選択可能な
溶射材料、仕上げ方法

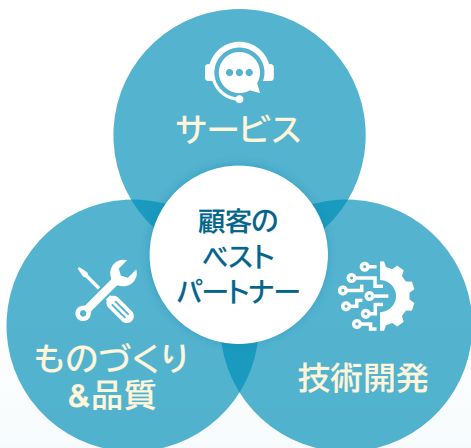
最適な
ソリューション

溶射の長所を生かす
施工技術が当社の強み

あらゆる製造業の様々なニーズへの対応を通じて培った「表面改質技術に対する豊富な知見」が源泉となり、高い競争優位性を生み出している

強みの源泉 三位一体のソリューション提供

顧客の課題を掘り起こし、適切な提案へ繋げる営業力

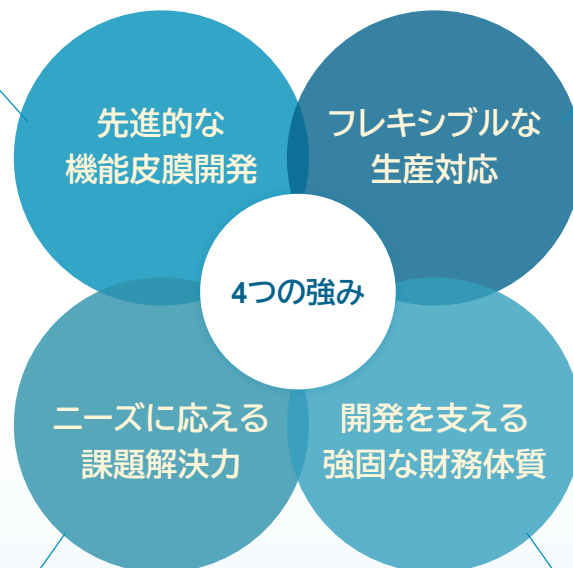


厳格な管理と
高度な製品レベルの維持

高品質・高機能を追求するため、
研究開発を継続的に実施

多様な産業分野へ
最先端の技術で
貢献

顧客の要望に沿った
オーダーメイド
の皮膜を提供



現場密着型の
適切な支援で
満足度を向上

高水準なROE・
自己資本比率を
安定的に維持

長年の施工で培ってきた豊富な知見

技術交流や共同開発でより一層の企業価値向上へ

本資料における将来に関する記述は、発表日現在、当社が入手可能な情報に基づいて判断したものであり、今後のさまざまな要因により、実際の業績等はこれら見通しと大きく異なる結果となる可能性があります。

お問い合わせ先

トーカロ株式会社

経営企画部

TEL: 078-303-3433 (代)